



Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2011年6月7日

献学60周年記念礼拝



献学60周年記念事業
国際基督教大学



ICU献学60周年記念事業 2011年6月7日(火)

【献学60周年記念礼拝】

司式:永田 竹司牧師

讃美歌:第6番「われら主をたたえまし」

聖書朗読:「コリント人への第1の手紙 第13章」 永田 竹司牧師

挨拶:学長 鈴木 典比古

礼拝説教:聖路加国際病院理事長 日野原 重明

「ICUのリベラルアーツの基礎となる愛と平和のスピリット」

2011年度 献学60周年記念礼拝

荘厳な雰囲気の中に始まり、 温かな想いに満ちて終わった記念礼拝

入学式や卒業式など、大学生活の節目節目で皆が集う大学礼拝堂。大学の長い歴史を見守ってきたこの礼拝堂で、献学60周年記念期間初年度にあたる2011年6月7日、献学60周年記念礼拝が永田牧師司式のもと行われた。そして大学とも深い関わりを持つ聖路加国際病院理事長日野原重明先生が説教者として礼拝に参列された。先生の滋味あふれる話しぶりとICU教育の原点であるリベラルアーツへの想いにあふれた深い内容の説教は参列した人々を魅了した。



荘厳なオルガン前奏が奏でられる中、大学の教職員や学生、教会関係者など約600人が礼拝堂の席を埋め尽くした。永田牧師による祈りで始まった礼拝では、参列者一同による讃美歌「われら主をたたえまし」の合唱に続き、聖書からは使徒パウロのコリント人への第1の手紙第13章が朗読された。

Dialogue

Creating the Next 60 Years

「愛は寛容であり、愛は情深い。
また、ねたむことをしない。
愛は高ぶらない、誇らない。
不作法をしない、自分の利益を求めない、
いらだたない、恨みをいだかない。
不義を喜ばないで、真理を喜ぶ。
そして、すべてを忍び、すべてを信じ、
すべてを望み、すべてを耐える。
愛はいつまでも耐えることがない。」

「愛」の精神をうたったこの有名な御言葉は、日野原先生の礼拝説教のテーマ「ICUのリベラルアーツの基礎となる愛と平和のスピリット」に通じる。



日野原重明先生とICUとの深いご縁と繋がる思い

献学60周年を前に、ICUの歩みに関わってきたすべての人の努力と苦勞に対する感謝の祈りを捧げた永田牧師に続き、鈴木典比古学長が登壇され、日野原先生の来学に謝辞を述べると共に、先生のご紹介そして大学献学時までさかのぼる先生とICUとの長く深い関わりを紹介された。



日野原先生は1911年、山口県生まれ、今年10月のお誕生日で100歳を迎える。京都大学医学部卒業後、京都大学大学院を修了、アメリカのエモリー大学に留学される。帰国後は聖路加国際病院で内科医長、病院長などをご歴任、現在は聖路加国際病院理事長、名誉院長、聖路加看護学園理事長をされている。1982年に日本医師会最高優功賞、2005年に文化勲章を受章、日本のお医者様の第一人者である。

また、ICUとは非常に深いつながりがある。ICUが献学された1953年から、ICU初代総長湯浅八郎氏と聖路加国際病院長の橋本寛敏氏の勧めで、日野原先生は聖路加国際病院での内科部長でありながら、教授として1953年から4年間「社会衛生学」や、時には体育の授業を教え、大学診療所の顧問も務めた。その後、1991年から2001年まではICU評議員として、大学の運営に関わっていただいた時期もある。

記念礼拝にふさわしいメッセージを私が送ることができればいい

「今回の私の講話は、いわゆる説教とは少し違っているかも知りませんが、この記念礼拝のなかで、それにふさわしいメッセージを私が送ることができればいいと思っております」。日野原先生のやわらかい話しぶりで講演は始まった。



大学の成長をずっと見守り続けていらした先生の礼拝説教のテーマも、献学以来ICUの教育の核である「リベラルアーツ」。そのリベラルアーツの本質を、ICUのリベラルアーツの礎を築いた先達のお一人である日野原先生が、エピソードやユーモアを交えながら、わかりやすく説いてくださる。

「感性が高い」ということが、リベラルアーツには一番大切なこと

あと4ヵ月ほどで100歳を迎えられる日野原先生は、「ここまで長生きできるとは夢にも思っておりませんでした」と、まず参列者の笑いを誘った。幼い頃から病弱であり、医者になるまで二度も大病を患い、長期療養を強いられた。しかし、この病に伏している時間こそ、今日の日野原先生の医療に対する信念と、音楽に対する深い愛情と造詣を育んだ。

先生の人生を大きく左右する出来事は、まず10歳の時に訪れる。急性腎臓炎を煩い1年間運動を止められた日野原少年は、母親の勧めでピアノを習い出す。これが、その後の音楽との長い付き合いのきっかけとなる。また同じ頃、やはり病弱であった母親が尿毒症で死の淵を彷徨った。その時、大好きな母親を助けてくれた主治医の安永謙逸先生の献身的な姿をみて、自分も将来病気で苦しんでいる人を助けたいと思い医療の道を目指す。

京都帝国大学医学部に入学して1年後に肺結核を患い、さらに肋膜炎を発症、休学を余儀なくされる。39度の熱が8ヵ月も続き、トイレすら行けず、絶対安静の寝たきり状態を強いられる。「もう医者はだめだと私はすっかり思いました」と幼少からの夢をあきら

めかけていた日野原先生だが、寝ていてもできる事はないかと、家にあった蓄音機のを妹にかけてもらい、曲を五線紙に写して時を過ごし、最後には独学で作曲ができるまでに至ったという。

そうした長期療養を経験し、ご自身が師と仰ぐシュバイツァー医師同様、音楽に精通した医師への道を進むことになる。

「私が医者でありながら、合唱団の指揮をしたり、フォーレのレクイエムの混声合唱団を指揮したり、NHKの室内楽を指揮するようなことができたのは、私が病気したため」
患者の苦しみを体験したからこそ、自分は医者として患者の悩みや苦しみが実感できた。

先生は医学生や看護学生に対しても「君たちも死なない程度に病気をやったほうがよい」と冗談まじりに論ずという。

「病んだことのない医者は、いい臨床医にはなれない」

人の痛みを理解するには感性を育てなければならず、それこそがリベラルアーツ教育の神髄であると日野原先生は説かれる。

「病むこと自体、いつもマイナスだけでなく、それからより深い人間になって、弱い人のサポートができるようになる」人を日野原先生は「感性の高い」人と呼ぶ。「この感性が高いということが、リベラルアーツには一番大切なこと。同情ではない。シンパシー(sympathy)ではなく、エンパシー(empathy)です」

リベラルアーツはなぜ大切なのか

当時からチャペルアワーを導入するなど、国際性とキリスト教精神のうちに「本当にリベラルな教育をここではする」ということで、ICUが始まったと日野原先生は当時の事を思い起こされる。

「同時に、将来文系に行くか理系に行くかっていうことがまだわかってないけども、その2年の間に自分を開発して、そのリベラルアーツが終わったら、その次にサイエンティストに、あるいは経済を学ぶなど専門的な研究に従事するという、深いリベラルアーツを実現しようと、このICUが始まったわけです」

聖路加看護大学でも学長を務められ、医師としての多忙な業務の傍ら数多くの教育機関で教鞭をとられた日野原先生は、欧米と比較して日本の大学はリベラルアーツ教育

を軽視していると、大学教育改革の必要性を強調される。

「医学部生は試験で高得点ならばそれでいいというような、偏差値じゃ適性はわからない」と、医師をめざす者の志の重要性を訴えられる。

例えばアメリカでは、医師になるためには4年制の大学を卒業した後、大学院に相当する4年制の「メディカルスクール」に進学するが、多くの学生はgap yearと称して、社会に一旦出てボランティアなど社会経験を積んでから改めて大学院に進学する。メディカルスクールへの入学面接も、何人もの面接官が一人に対して1時間もの時間をかけて趣味や経験など幅広いことを尋ねることにより、学力だけではなく志願者の人間性や医師としての資質を慎重に検討するという。

つまり、アメリカでは8年以上かかってやっと医師を名乗れる。その間、医学だけでなく、幅広い知識と教養を身につけて初めて医者になれるという。「教養が十分に教えられないまま、それでも卒業はできるという日本の現状を早く改革しなくてはならない」と、人間性の育成の重要性を日野原先生は強調される。

これを解決するためには日本でも法科大学院のように、従来の制度に縛られない「教育特区」を設けてアメリカ式のメディカルスクールを設立することを日野原先生は提案されている。



愛というものは必ず犠牲を伴うもの

日野原先生の説教に先立ち、聖書朗読された「コリント人への第1の手紙 第13章」、この愛のスピリットこそ、実は聖路加看護大学の建学の理念であるリベラルアーツの基礎となる、と日野原先生の話は続く。

先生が現在も理事長を務める聖路加看護大学は、15年前に建物を建て直したが、聖路加看護大学図書館入口左側には「知と感性と愛のアート」と刻んだプレートがある。この言葉は、聖書の中のピリピ人への手紙の1章9節

「わたしはこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなた方が、何が重要であるかを判別することができる」をもち、先生が選ばれた言葉である。

古くはプラトンが、「愛」には「エロス」と「アガペ」があると説いた。自分の足りないところを補い合う「求める愛」が「エロス」であるのに対して、自分が他人に提供するキリスト教的な愛の概念を「アガペ」と名付けた。

「このアガペというのは、神から人間に提供される、キリストを通して神が人間に提供されるという意味で、我々に与えられるものとして説明している。これが非常にいい教えだと思ったわけです」

Dialogue

Creating the Next 60 Years

かつての聖路加国際病院のナースは皆濃紺のマントを身にまとい、若かりし頃の日野原先生も、その姿の美しさに魅了された一人であった。しかし、その「愛のマント」の裏側は、実は赤い裏地となっており、後になって愛のマントも血で染まる、つまり愛には血の出るような犠牲が伴うとを感じるようになったそうだ。「今日のメッセージで申し上げたい。愛というものは必ず犠牲を伴うものだということを」

そのような犠牲的精神の例として、先生は二つのことを紹介された。

2001年にJR新大久保駅構内の線路に落ちた人を見ず知らずの韓国人の留学生と日本人のカメラマンが助けようとしてとび込み、逆に電車に轢かれて亡くなった事件。

「日本にわざわざ留学に来たのに、日本人が死ぬというところを見たら、もう助けざるを得ないと反射的に行動して、そうして不幸にも死んでしまった。このニュースを知った日本人も感動した。その家族への見舞金が集まったが、そのご両親は受け取らず、日本で学ぶ留学生を支援する奨学金が設立された。このような韓国の若者やご両親がいるのです」

それより前の1992年、アメリカに留学した16歳の日本人の高校生がハロウィンの時に誤って銃殺された事件。この事件では、両親が犯人を恨むよりも市民が銃を所持できる事に問題がある、と法改正の署名活動を起こした。いずれも犠牲の上に立った愛ある行動と先生は讃えられた。

愛することができないのは、赦すことができないから。学校のいじめも、まずは赦すことができるようになれば、子供達は互いに仲良くなれて、学校のいじめもなくなるのではないか。日野原先生はここ数年、小学校を回り、赦し合うことの大切さを中心に「いのちの大切さ」を教える「いのちの授業」を子供達に行っておられます。

聖路加国際病院の守護聖人である聖ルカによる福音書 第6章35節に

「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなた方の父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」

と記している。これは敵を愛し、人によくしてあげなさい。なんかを貸したという場合はこれをあげたと思いなさい、という日常の姿勢を説いているのだと日野原先生はおっしゃる。

さらに先生は元テレビキャスターの山川千秋氏にまつわるエピソードを紹介された。

当時食道がんと宣告され、絶望の淵に立たされていた夫を見かねた山川氏の奥さんは、宣教師に助けを求めた。しかしその宣教師は、自分では山川氏の心を和ませることはできないが、ニューヨークのリハビリテーションの研究所の病院の壁に、ある患者が書いた詩がある。この詩を紹介しようと言ってくれた。それがこの詩だ。

病者の祈り

大事をなそうとして、力を与えてほしいと神に求めたのに
慎み深く従順であるようにと、弱さを授かった。

より偉大なことができるように、健康を求めたのに
より良きことができるようにと、病弱を与えられた。

幸せになろうとして、富を求めたのに
賢明であらうようにと、貧困を授かった。

世の人々の賞賛を得ようとして、権力を求めたのに
神の前でひざまずくようにと、弱さを授かった。

人生を享楽しようとして、あらゆるものを求めたのに
あらゆるものを喜べるようにと、生命を授かった。

求めたものは一つとして与えられなかったが、
願いはすべて聞き届けられた。

神の意にそわぬ者であるにもかかわらず、
心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた。

わたしはあらゆる人の中でももっとも豊かに祝福されたのだ。

(作者不詳)

山川氏は、この詩を読んで、「自分は病気を与えられて、それにより生き返るんだ」と思い、気持ちが救われたそうだ。

「こういう言葉が絶望的ながん患者を助けたのです」

日野原先生は、このエピソードに通じる聖書のヤコブ第1章12節の一文を引用された。

「試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです」



リベラルアーツの最高にいる人物——加藤周一氏

アメリカの同時多発テロで亡くなったソムリエの妻のエピソードも紹介された。ソムリエはあのビルの最上階で働いていたのです。新聞記者がソムリエの遺された奥さんに「犯人が憎いでしょう」と言うと、妻は「復讐とか報復とか言うことを彼(夫)は必ず拒否するでしょう。彼は犯人と話したかった。その死を逆さまにして、私たちが他の人間の血を流してはなりません」と答えたという。

驚いた記者は、さらにその意味を追求するが、彼女は冷静にこう続けた。「夫は話し合いが暴力よりも実り多いものだと思っていました。私たちはこのような犯罪が繰り返されるのを防ぐように努めなければなりません。それには、私たちが憎む人々と共通の理解に達しなければならないのです」

しかし報復を拒否すると言っている当事者に対して、当時のアメリカ大統領ブッシュは反テロの名目でアフガニスタンやイラク攻撃を開始し、多くの市民が犠牲となった。

「戦争というものは、神様から与えられた命を人工的に壊してしまう。そのような権利は人間にはないはずです」

このエピソードは、評論家で医学博士でもあった故加藤周一氏の「夕陽妄語」というコラム(2001年10月25日付朝日新聞)で紹介された話である。日野原先生はこの文章の秀逸さにも言及され、「完全なりベラルアーツを整えた人でないと、書けない言葉です」と絶賛。「人間の本来の人間性とは、どういうふうなものであるかを、職業と関係なくわかる。そういう教養が本当のりベラルアーツで、加藤周一さんはまさしくりベラルアーツの最高にいる。私達が学ばなくてはならないものだとは私は考えます」。

Dialogue

Creating the Next 60 Years

「さらに米国のような大国は自制する責任がある。超大国には、小国にとってよりも、大きな道義的責任、殊に軍事力の行使を自制する責任があるだろう。その自制が十分でないと感ずるとき…テロリズムが生じることもあり得るのだ」という加藤氏の主張を日野原先生は引用し、「大きな国こそ、人間の命を大切にす国であることを実証することが重要」と訴えられる。

大きな戦争を自らも体験し、数多くの著書でも平和への強い思いを伝えられる日野原先生は、それら著書の中でも「平和とは、究極の愛の形である」と語っておられるが、3月の東日本大地震を機にあらゆる物事が棚上げ状態になっていることを指摘され、前の総理大臣を退陣にまで追いやったほどの重要な問題にもかかわらず、現在凍結同然の状態である普天間の問題にも触れられた。

この礼拝の2週間前、日野原先生は、沖縄県普天間を訪問、沖縄で行った新老人の会主催の沖縄住民へのフォーラムで「10年後に米軍の完全撤退を約束すると言ったら、それまで沖縄内の今の軍事基地はアメリカと日本政府が協定した通りににしても、沖縄の住民は、それまで辛抱しますか『辛抱します』といえる人は手を挙げて下さい」と言ったところ、参加者が全員手を挙げました。「このように10年先の案を示して米軍と交渉するような政治家が今の民主党内に一人もないことは遺憾だ」と日野原先生は述べられました。

そうなれば、その10年後に、米軍への基地提供を解消し、その後は日本は完全に軍隊のない独立国家として「捨て身になること」が本当の平和につながっていると先生は主張される。

ICU卒業生に実現してほしいこと

最後に、大学設立にあたり、募金活動の先頭に立ち半年で1億5千万円という多額の募金を集めることに尽力された当時の日銀総裁・一万田尚登氏を記念して2002年に設置された「平和の鐘」(ピースベル)に言及され、「私は皆さんにお願いしたい。自由というものを具現するために、ここの卒業生が立ち上がってほしい」と述べられ、先生はその日の説教を締めくくった。

日野原先生の巧みな話術に、参列者は皆引き込まれ、1時間ほどの説教があつという間に過ぎていった。その後、参列者全員で大学歌を合唱し、永田牧師による祝祷をもって記念礼拝は終了。パイプオルガンが後奏を奏でる中、日野原先生の退出を参列者全員が万雷の拍手で見送った。

